

柳井田下ノ原遺跡
福原原開遺跡
竹並下ノ原遺跡 2

行橋市文化財調査報告書
第 48 集

2013

行橋市教育委員会

序

本書は、平成23年度に一般県道長尾稗田平島線歩道整備工事に先立ち実施した、柳井田下ノ原遺跡、福原原開遺跡、竹並下ノ原遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する泉地区は、京都平野北部の低台地上にあたり、近辺には竹並遺跡、福原長者原遺跡など多くの遺跡が知られています。今回の調査では古墳時代後期、奈良時代および江戸時代以降の集落跡の一部を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県京築県土整備事務所、福岡県教育委員会、地元の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成25年3月

行橋市教育委員会
教育長 山田 英俊

例　　言

1. 本書は、福岡県行橋市泉中央8丁目172－3番地ほかに所在する柳井田下ノ原遺跡、福原原開遺跡、竹並下ノ原遺跡（第2次調査）の発掘調査報告書である。一般県道長尾柳田平島線歩道整備工事に伴って平成23年度に発掘調査を実施した。
2. 調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。
3. 遺構実測は工藤祥子、田中すま子、谷口貞子、山口佳織、渡邊知栄が行った。
4. 遺構写真は山口裕平が撮影した。
5. 遺構図の整理は鎌田尚子、山口裕平が行った。
6. 遺物の実測は定野美津子、山口裕平が行った。
7. 遺物写真は山口裕平が撮影した。
8. 遺構・遺物図面の浄書は松尾留衣が行った。
9. 本書に使用した遺構の略号は SD（溝）、SI（竪穴建物）、SJ（土器埋設遺構）、SK（土坑）、SP（柱穴）、K（攪乱）である。
10. 本書に使用した方位は世界測地系に基づく座標北である。
11. 本書に報告した遺物・図面・写真は行橋市教育委員会において保管している。
12. 福原原開遺跡採集の旧石器は、杉原敏之氏（九州歴史資料館）が実測を行い、所見について教示を頂いた。
13. 本書の執筆・編集は山口裕平が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（日誌抄）	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の記録	5
第1節 調査の方法	5
第2節 柳井田下ノ原遺跡	5
(1) 1区	5
(2) 2区	5
(2) 3区	5
第3節 福原原開遺跡	8
第4節 竹並下ノ原遺跡	13
第4章 結語	17

図版目次

- 図版 1 柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡の位置
- 図版 2
1. 柳井田下ノ原遺跡〔調査前〕(西から)
2. 柳井田下ノ原遺跡1区全景(東から)
3. 柳井田下ノ原遺跡3区全景(東から)
- 図版 3
1. 柳井田下ノ原遺跡3区土坑1(南西から)
2. 柳井田下ノ原遺跡3区土坑1 遺物出土状況
3. 柳井田下ノ原遺跡3区柱穴4 遺物出土状況
- 図版 4 柳井田下ノ原遺跡出土遺物
- 図版 5
1. 福原原開遺跡1区〔調査前〕(南から)
2. 福原原開遺跡1区全景(南から)
3. 福原原開遺跡1区全景(北から)
- 図版 6
1. 福原原開遺跡1区竪穴建物1 遺物出土状況(西から)
2. 福原原開遺跡1区竪穴建物1(西から)
3. 福原原開遺跡1区竪穴建物1 土師器出土状況(西から)
- 図版 7
1. 福原原開遺跡1区溝1(南西から)
2. 福原原開遺跡1区溝1 東側土層(西から)
3. 福原原開遺跡1区溝1 西側土層(東から)
- 図版 8
1. 福原原開遺跡2区〔調査前〕(北から)
2. 福原原開遺跡2区全景(北から)
3. 福原原開遺跡2区溝状遺構(東から)
- 図版 9 福原原開遺跡出土遺物1
- 図版 10 福原原開遺跡出土遺物2
- 図版 11
1. 竹並下ノ原遺跡全景(北から)
2. 竹並下ノ原遺跡全景(南から)
- 図版 12
1. 竹並下ノ原遺跡土器埋設遺構
2. 竹並下ノ原遺跡土器埋設遺構土器取り上げ後
3. 竹並下ノ原遺跡出土遺物

挿図目次

- 第 1 図 柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡調査区域 (1/1,500)
- 第 2 図 柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡の位置 (1/2,000,000)
- 第 3 図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)
- 第 4 図 柳井田下ノ原遺跡遺構配置図 (1/200)
- 第 5 図 柳井田下ノ原遺跡出土土器実測図 (1/3)
- 第 6 図 福原原開遺跡遺構配置図 (1/200)
- 第 7 図 福原原開遺跡竪穴建物 1 実測図 (1/50)
- 第 8 図 福原原開遺跡竪穴建物 1 出出土器実測図 (1/3)
- 第 9 図 福原原開遺跡溝 1 ほか出土遺物実測図 (1/1・1/3)
- 第 10 図 竹並下ノ原遺跡遺構配置図 (1/200)
- 第 11 図 竹並下ノ原遺跡出土土器実測図 (1/3)

表目次

- 表 1 柳井田下ノ原遺跡出土遺物観察表
- 表 2 福原原開原遺跡出土遺物観察表 1
- 表 3 福原原開原遺跡出土遺物観察表 2
- 表 4 竹並下ノ原遺跡出土遺物観察表

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

国道496号線は行橋市草野から大分県中津市山国町を経由し、同日田市高瀬に至る総延長67.0kmの一般国道である。行橋市域の沿線は、みやこ町豊津や犀川方面から行橋市中心部に抜ける幹線道路として栄え、近年は周辺が商業地化されたこともあり、沿線の人口が増加し、これに比例して交通量も多くなってきた。国道496号線は南泉の福原交差点で、西に延びる県道34号線（行橋添田線）、東に延びる県道250号線（長尾神田平島線）と交差するが、交差点付近の幅員は狭く、十分な歩道幅も確保されておらず、北に程近い泉小学校、泉中学校へ通う小・中学生らの登下校路としてはなはだ危険な状態にあった。

このため、福岡県京築県土整備事務所は、福原交差点周辺の車道拡幅と歩道の新設を事業化（一般県道長尾神田平島線歩道整備工事）し、平成22年8月に行橋市教育委員会に対し、埋蔵文化財の有無についての照会を行った。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地では無かったものの、すぐ南を通る東九州自動車道建設に伴い竹並下ノ原遺跡が新規に確認され、平成22年度に発掘調査が行われていた。このことから、平成23年8月15日に工事予定地点の計8箇所で試掘調査を行ったところ、3ヶ所で溝や柱穴などの遺構が確認された。このため福岡県教育委員会に対し試掘調査の結果報告を行い、新規に柳井田下ノ原遺跡、福原原開遺跡の2遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として決定された。あわせて竹並下ノ原遺跡の範囲が広がることになった。これを受けて福岡県京築県土整備事務所と行橋市教育委員会の間でこれら3遺跡の発掘調査に関する協議を行い、同年度内に行橋市教育委員会が主体となり発掘調査を行う運びとなった。

調査期間は平成23年8月31日から同10月14日まで、実数25日間をかけて調査を行った。調査面積は約420m²で、調査体制は次節に示す通りである。

第2節 調査体制

現地調査（平成23年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	山田 英俊
		教育部長	三角 正純
調査		教育部 文化課長兼文化財保護係長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	伊藤 昌広
		教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（調査担当）
庶務		教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋智恵子
		教育部 文化課 文化振興係	北田千砂子
発掘調査作業員	大村 英幸	小野田トミエ 小潤八寿子 工藤 祥子 田中すま子 谷口 貞子	
	長谷川 進一	松尾 公子 山口 佳織 山本 要二 吉田 幸子 渡邊 知栄	

報告書作成（平成24年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	山田 英俊
		教育部長	三角 正純
調査		教育部 文化課長兼文化財保護係長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	伊藤 昌広
		教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（報告書担当）
庶務		教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋智恵子
		教育部 文化課 文化振興係	人生 佳奈
整理作業員	枝吉 恵美 奥野 康代 鎌田 尚子 佐々木豊子 定野 美津子 松尾 留衣 松本まゆみ		

第3節 調査の経過（日誌抄）

平成23年8月31日（水）【晴れ】

柳井田下ノ原遺跡の1区の表土剥ぎ開始。

平成23年9月2日（金）【曇り】

本日より発掘作業員を投入。午後より遺構検出を開始する。遺構は無さそうである。

平成23年9月5日（月）【晴れ】

1区の掘り下げを終了。写真撮影を行い、光波トランシットで調査区の杭打ちを行う。

平成23年9月6日（火）【晴れ】

1区の平板測量を行う。午前中で作業を終える。

平成23年9月7日（水）【晴れ】

1区を埋め戻し、2区の表土剥ぎを行う。

平成23年9月8日（木）【晴れ】

引き続き表土剥ぎを行う。遺構は無さそうである。

平成23年9月12日（月）【晴れ】

4日振りの作業。3ヶ所の擾乱を検出する。

平成23年9月13日（火）【晴れ】

2区の写真撮影を行い、平板測量を行う。午前中で作業を終える。

平成23年9月14日（水）【晴れ】

2区の埋め戻しを行い、3区の表土剥ぎを行う。

平成23年9月15日（木）【晴れ】

3区の遺構検出を行う。土器がバラバラ出土する。

平成23年9月16日（金）【曇り時々雨】

3区の掘り下げを行なう。降雨により午前中で作業を終了。

平成23年9月22日（木）【晴れ】

台風15号襲来のため、6日振りの作業となる。

平成23年9月26日（月）【晴れ】

遺構の掘り下げが終わり、写真撮影を行う。

平成23年9月27日（火）【晴れ】

平板測量を終え、柳井田下ノ原遺跡の調査を終える。

福原原開遺跡1区の表土剥ぎを始める。

平成23年9月28日（水）【晴れ】

引き続き表土剥ぎを行う。

平成23年9月29日（木）【曇り】

1区の遺構検出、掘り下げを行う。光波トランシットで調査区の杭打ちを行う。

平成23年10月3日（月）【曇り】

豊穴建物を検出する。遺構の掘り下げを行う。

平成23年10月4日（火）【晴れ】

1区の掘り下げを終了。写真撮影を行い、豊穴建物の実測、遺物取り上げを行う。平板測量を行う。

平成23年10月5日（水）【雨】

福原原開遺跡2区の表土剥ぎを行う。

平成23年10月6日（木）【曇り】

引き続き表土剥ぎを行う。

平成23年10月7日（金）【曇り】

表土剥ぎを終え、遺構検出、掘り下げを始める。

平成23年10月11日（火）【晴れ】

掘り下げを行い、平板測量を行う。

平成23年10月12日（水）【曇り】

2区の掘り下げを終え、写真撮影を行う。平板測量を行う。竹並下ノ原遺跡の表土剥ぎを始める。

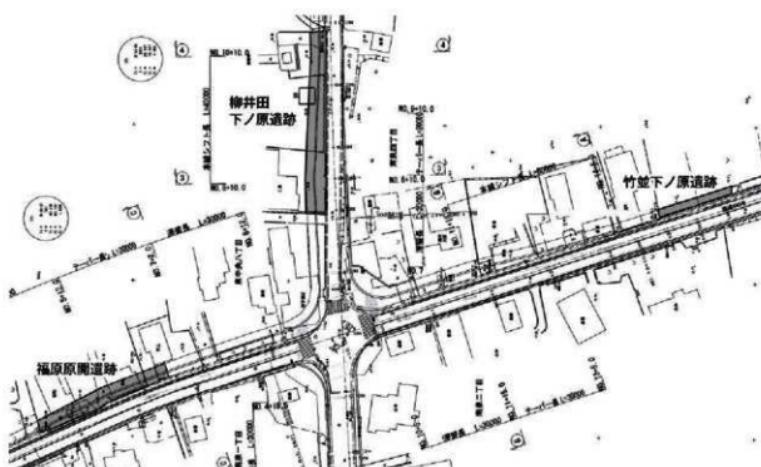
平成23年10月13日（木）【曇り】

遺構の掘り下げを終え、写真撮影、平板測量を行う。

福原原開遺跡2区の埋め戻しを行う。

平成23年10月14日（金）【雨】

竹並下ノ原遺跡の埋め戻しを行い、現場での作業を終了する。



第1図 柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡調査区域 (1/1,500)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県東部に所在する（第2図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,787人（平成24年12月末日現在）を擁す。

市域は京都（行橋）平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔246.9m〕が東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に觀音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、穂山〔121.7m〕など少數の独立山塊がある。

市内には英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長崎川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する柳井田下ノ原遺跡、福原原開遺跡、竹並下ノ原遺跡は、京都平野のほぼ中央の今川・祓川間の低位段丘、標高15～18m地点に所在する。

第2節 歴史的環境

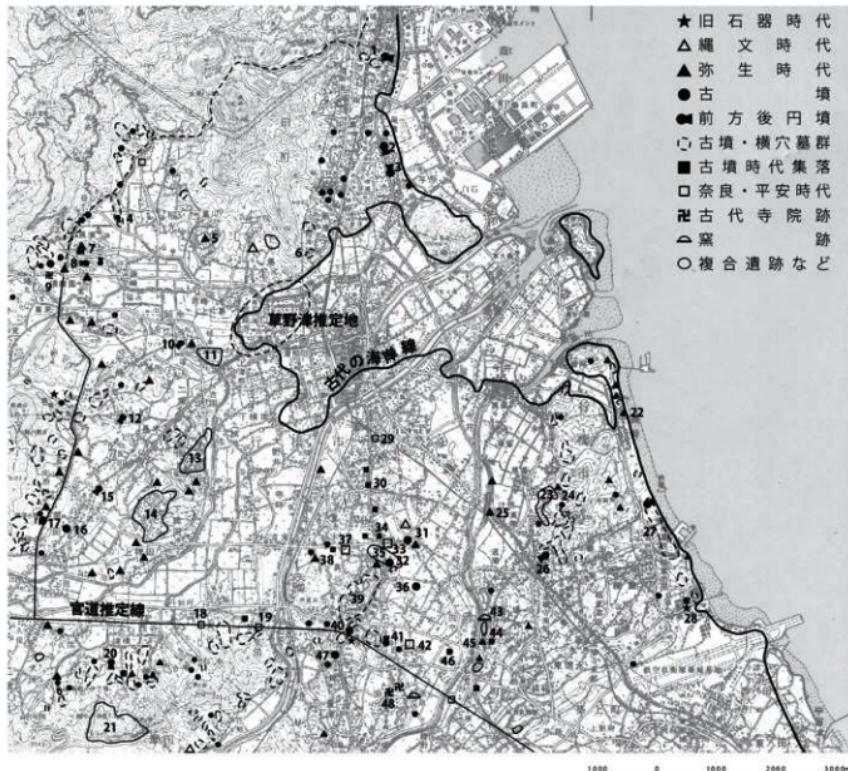
京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築柴遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永一津熊一大橋一今井一津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、糸島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第3図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、草期の押型文土器（竹並遺跡など）、後期の西平式系土器（下崎瀬戸溝遺跡）など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500年前頃を境に、生業の主体と狩猟採集とする縄文時代から稻作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下神田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。



第2図 柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡の位置 (1/2,000,000)



- | | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|------------|-------------|------------|
| 1. 石塚山古墳 | 2. 番塚古墳 | 3. 郡所山古墳 | 4. 神後古墳 | 5. 萩川遺跡 | 6. 猪黒古墳群 |
| 7. 黒添メト塚古墳 | 8. 徳永丸山古墳 | 9. 椿市廻寺 | 10. ピワクマ古墳 | 11. 延永ヤヨミ遺跡 | 12. 八雷古墳 |
| 13. 前山古道跡 | 14. 下柳田遺跡 | 15. 庄屋塚古墳 | 16. 梶塚古墳 | 17. 稲塚古墳 | 18. 大谷車輪遺跡 |
| 19. 天生田大池遺跡 | 20. 片崎1号墳 | 21. 御所ヶ谷神籠石 | 22. 長井遺跡 | 23. 代道跡 | 24. 馬場代2号跡 |
| 25. 江坂遺跡 | 26. 車人塚古墳 | 27. 稲童古墳群 | 28. 渡築紫古墳 | 29. 鴨野道跡 | 30. 福富小堀遺跡 |
| 31. 侍塚遺跡 | 32. ヒメコ塚古墳 | 33. 柳井畠下ノ原遺跡 | 34. 稲原原間遺跡 | 35. 竹里下ノ原遺跡 | 36. 鬼熊遺跡 |
| 37. 福長者原遺跡 | 38. 矢留堂ノ前遺跡 | 39. 竹並遺跡 | 40. 甲塚古墳 | 41. 晴社古墳 | 42. 豊前国府跡 |
| 43. 屋敷窯跡 | 44. 篠先遺跡 | 45. 徳永川上遺跡 | 46. 京ヶ辻遺跡 | 47. 志徳古墳群 | 48. 豊前国分寺跡 |

第3図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になんでも古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廻寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。

本書で報告する3遺跡は古墳時代、奈良時代及び近世以降を中心とする遺跡である。

第3章 調査の記録

第1節 調査の方法

調査区域は、バックホーにより表土剥ぎを行い、遺構検出につとめた。その後、人力で遺構の掘り下げを行った。

福原原開遺跡では竪穴建物を1棟検出し、縮尺20分の1で平面図、断面見通し図を作成した。なお調査範囲は縮尺100分の1で平板測量を行った。写真撮影は35ミリ白黒フィルム、同カラーリバーサルフィルムで調査の進展に従い順次行った。

以下、遺跡ごとに調査の報告を行う。

第2節 柳井田下ノ原遺跡

柳井田下ノ原遺跡は、本事業に伴い新規に確認した遺跡である。排土置き場の都合上、3回の反転を繰り返し調査を行った。西側の調査区を1区、中央を2区、東側を3区とした。行政地番は行橋市泉中央8丁目172-3番地、172-4番地、515-1番地になる。

(1) 1区(第4図、図版2)

行橋市泉中央8丁目172-3番地、172-4番地を中心とする約60mを調査した。

表土剥ぎの結果、標高16.1mよりバックホーのパケットの爪痕が残る擾乱を2ヶ所確認した。また土坑状の掘り込みを1ヶ所検出したが、出土遺物はなかった。

(2) 2区(第4図)

1区の東に隣接する約70mを調査した。行橋市泉中央8丁目515-1番地の西側にある。1区との間の約30mは人家の出入り口となるため調査できなかった。

擾乱坑を3ヶ所検出したのみで、遺構、遺物ともになかった。

(3) 3区(第4・5図、図版2~4、表1)

2区の東に隣接する約90mを調査した。行橋市泉中央8丁目515-1番地の東側にある。さらに東側は善徳寺の通用口となるため調査できなかった。遺構検出面の標高は15.3~15.8mである。

大小の円形の掘り込みを複数検出したが、遺物を伴う大型の掘り込みを土坑(SK)、小型の掘り込みを柱穴(SP)として以下に報告する。

SK001 調査区中央の北壁に接して検出した。さらに調査区外に広がる。楕円形を呈し、南北1.1m以上、東西2.7mを測る。上端は標高15.65m、底面は15.52m。出土した土師器、須恵器より、奈良時代の遺構と考えられる。

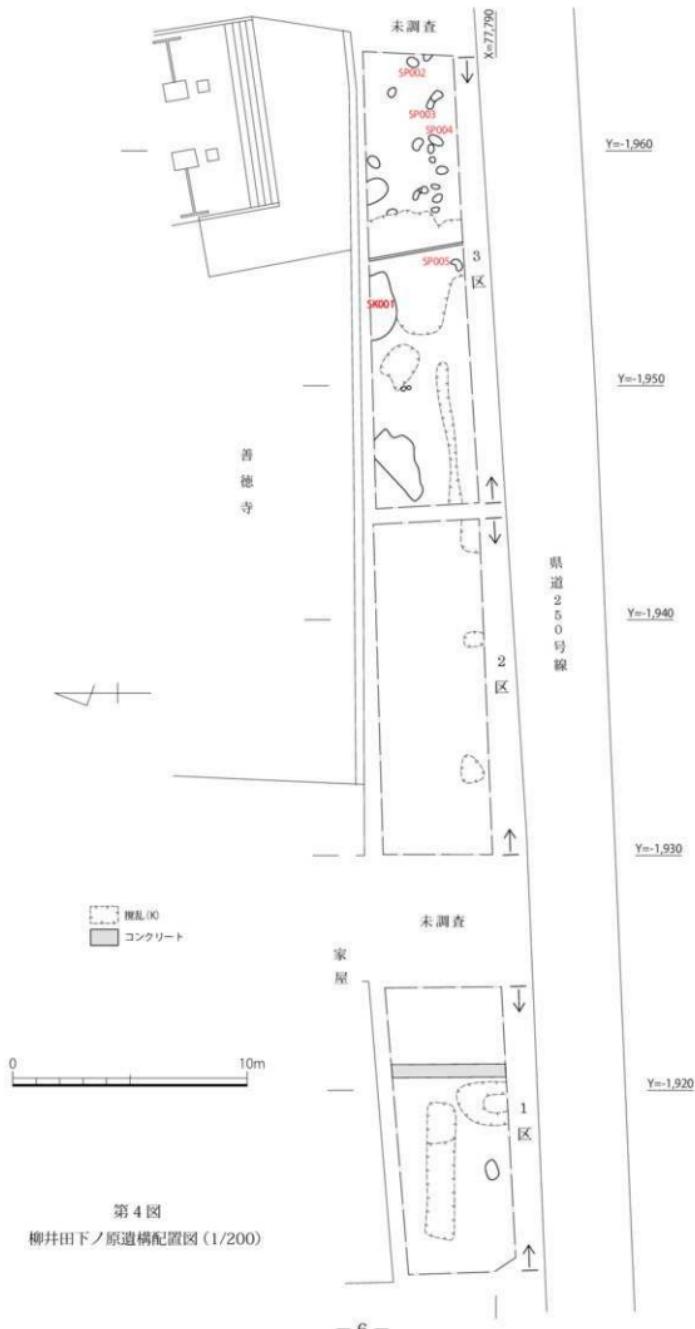
土師器 1・2は平底の壺。1は復元口径13.7cm、器高4.6m。2は底部小片。3は逆三角形の高台をもつ壺の小片。4はやや底部が丸みをもつ壺。復元口径13.2cm、器高2.1cm。5は皿の小片。6は甕の胴部片。

須恵器 7・8は摘みをもつ壺の蓋。摘みは扁平で頂部が凹む。7は復元口径13.15cm、器高2.85cm。8は復元口径13.8cm、器高2.05cm。9は壺の体部片。口縁にかけて直線状に広がる。復元口径16.6cm。10は皿の底部片。11は甕の破片。

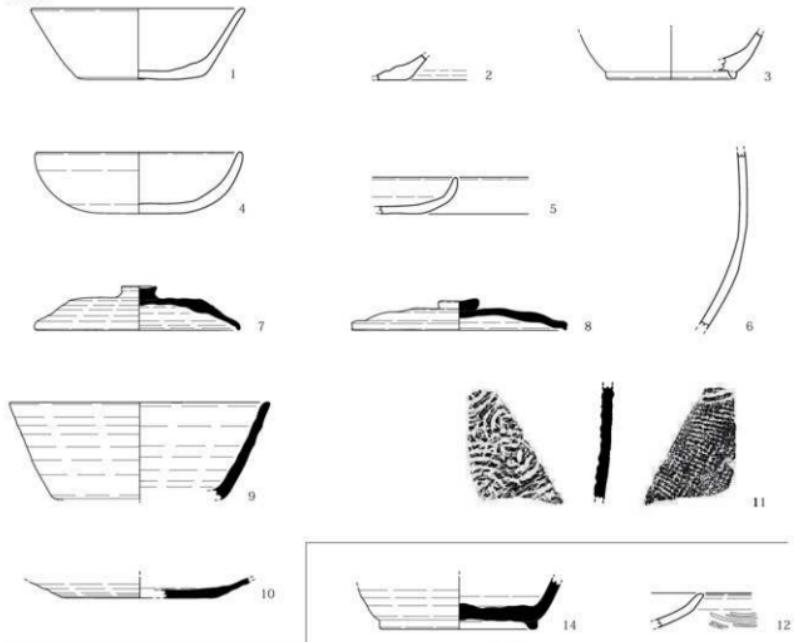
SP002 調査区北側で検出した。0.5×0.4mの楕円形をなす。出土遺物には土師器があるが、細片のため図示にたえない。

SP003 調査区北側で検出した。0.5×0.3mの楕円形を呈し、同様の小穴に切られている。出土遺物には土師器、須恵器があるが、細片のため図示にたえない。

SP004 調査区北側で検出した。0.7×0.4mの楕円形を呈す。出土遺物には土師器、須恵器があるが、細片のため図示にたえない。



SK001



SP005



第5図 柳井田下ノ原遺跡出土土器実測図(1/3)

SP005 調査区中央の搅乱を掘り下げた、標高 15.45m で検出した。長軸 0.6m、短軸 0.3m の弓形を呈す。土師器、須恵器、素書きの染付、焼し瓦が出土した。染付と瓦は上層の出土で、搅乱からの流れ込みと考えられる。

土師器 12 は壺の口縁部片。外面にヘラミガキ調整を施す。

須恵器 13 は壺の蓋。復元口径 15.6cm。14 は高台付きの壺の底部片。外面に十字のヘラ記号をもつ。

第3節 福原原開遺跡（第6～9図、図版5～10、表2・3）

福原原開遺跡も本事業に伴い新規に確認した遺跡である。排土置き場の都合上、1回の反転を行い調査した。行橋市泉中央8丁目492-1番地、同489-1番地の北側を中心とする北側の調査区（約85m²）を1区、泉中央8丁目488-2番地、同489-1番地の南側を中心とする南側の調査区（約85m²）を2区として調査を行った。

表土剥ぎの結果、溝状の落ち込みや円形の掘り込みなど複数検出した。遺物を伴う竪穴建物(SI)、溝(SD)を遺構として以下に報告する。

SI001 調査区の北側で検出した。検出面は標高16.35～16.55mである。確認できたのは東壁一辺と北壁、南壁の約半分である。西壁は調査区外に広がっているため正確な規模は復元できないが、北壁に接して熱を受けた焼土面を確認しており、これがカマド跡と想定し、北壁の中央部に位置していたと仮定して、東側を折り返し東西幅の復元をすれば、およそ4.8mの規模が推定される。南北長は4.2mである。主柱穴は東側の2つを確認した。北東側の柱穴は検出面で0.45×0.37mの楕円形を呈し、深さは約0.65mである。南東側は検出面で0.38×0.33mの円形を呈す。深さは約0.8mである。芯心間は2.12mを測る。西側は調査区外にあるものと想定される。したがってここでは、本竪穴建物の構造を、北壁中央にカマドを持つ、4本主柱の竪穴建物で、東西幅4.8m、南北長4.2mのやや横長の方形プランと考えることとした。

建物跡の床面は南で高く標高16.35m前後で、北東側にかけて5～10cm程1段下がっている。壁の立ち上がりは約6～23cmが残されていた。埋土は黒褐色粘質土である。均質であったことから分層はできなかった。埋土中からは10数点の土器が出土したが、そのすべてが床面から5～15cm程浮いた状態で出土している。したがって、本遺構の埋没過程中で廃棄されたものといえ、住居の明確な廃絶時期を示すものではない。なお遺物は上層、下層と分けて取り上げを行った。土器の年代観は6世紀後半の古墳時代後期末に位置づけられる。

上層

須恵器 1～3は环蓋。1は復元口径13.8cm。2・3は小片である。4～8は环身。4は底部片。5～7は口縁部の小片。8は復元口径12.8cm、器高4.0cmを測る。

下層

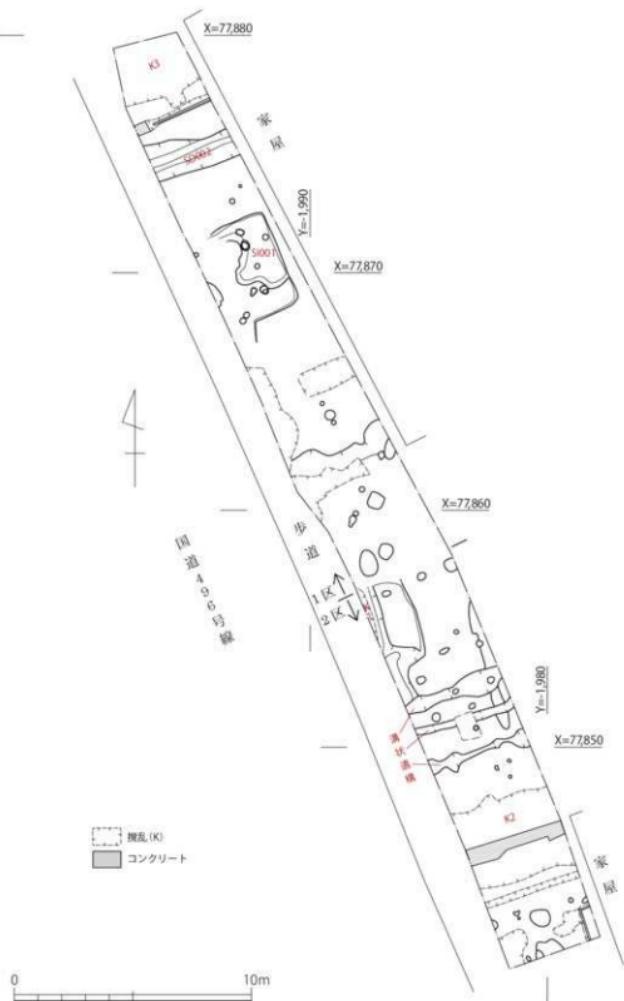
土師器 1は环蓋。半分程の破片だが、口縁部を欠く。10は瓶の胴部片か。11は甕。南東部から押しつぶされた状態で検出した。口縁部を欠く。胴部最大径は26.2cmで、器高は30cm程度か。

須恵器 12は环蓋の小片。13～21は环身。13・14は口縁部の小片。15・17・18は口縁部片。15は復元口径13.1cm。17は復元口径12.1cm。18は復元口径11.6cm。16・19・20はいずれも破片だが、全形を復元しえた。16は復元口径11.8cm、器高3.8cm。19は復元口径12.7cm、器高4.35cm。20は復元口径12.4cm、器高4.3cm。21は口縁端部を欠く。他と比較して焼成が著しく悪い。22は高环の环部片。23は高环の脚部片で、復元底径9.2cm。4方向の透かしを持つ。22・23は同一個体の可能性がある。24は甕の小片。

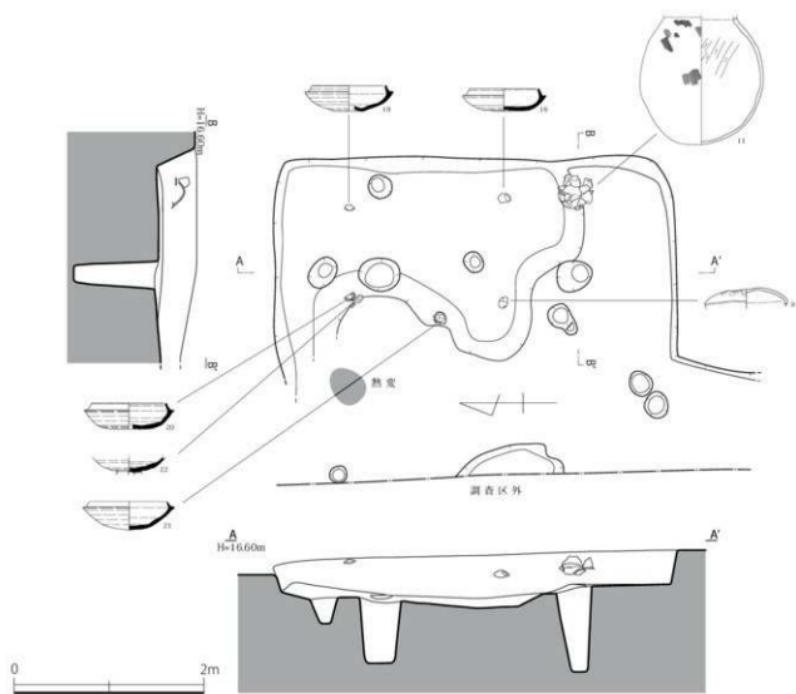
SD002 調査区の北側を東西に横断する。幅1.2～1.6m、長さ3.5m分を検出した。現存部の上端で標高16.4m、底面は15.93mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは直線的である。土層は固化していないが壁面観察を行い、下層は黒色粘質土の自然堆積、上層は褐色土が一気に埋まっている状況を確認した（図版7）。下層より染付、施釉陶器、瓦質土器、土人形などが出土した。遺物の組成より、近世後半以降の埋没を考えることができる。

染付 25は染付の底部片。見込みに「壽」と絵付けする。

施釉陶器 26は碗。素地は軟質で淡黄色を呈す。関西系か。27は蓋か。26と同様に、素地は軟質で黄味を帯びる。29は瓶。白泥釉を施す。くずし字が2字絵付けされるが、判読できなかった。30は行平鍋の蓋。摘みはロクロによる削り出しで、内外面とも一部帶状に鉄釉を施す。



第6図 福原原開遺跡遺構配置図 (1/200)



参考遺物実測図 11 は 1/10、9・16・19～22 は 1/8

第7図 福原原開遺跡竪穴建物1実測図(1/50)

陶器 30 は摺鉢の口縁部片で片口となる。内面には摺り目をぎっしり施す。31 は底部片。平底となる。4 条 1 単位の摺り目を施す。30・31 は同一個体ではないが、上野ないし高取系の陶器と思われる。

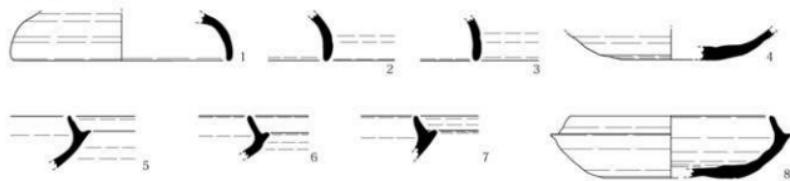
瓦質土器 32 は大甕の口縁部片。近世末期の佐野焼とみられる。33 は鉢か。

土人形 34 は袈裟をまとった僧形像と考えられる。型づくり成型で、内面には指頭痕を多く残す。

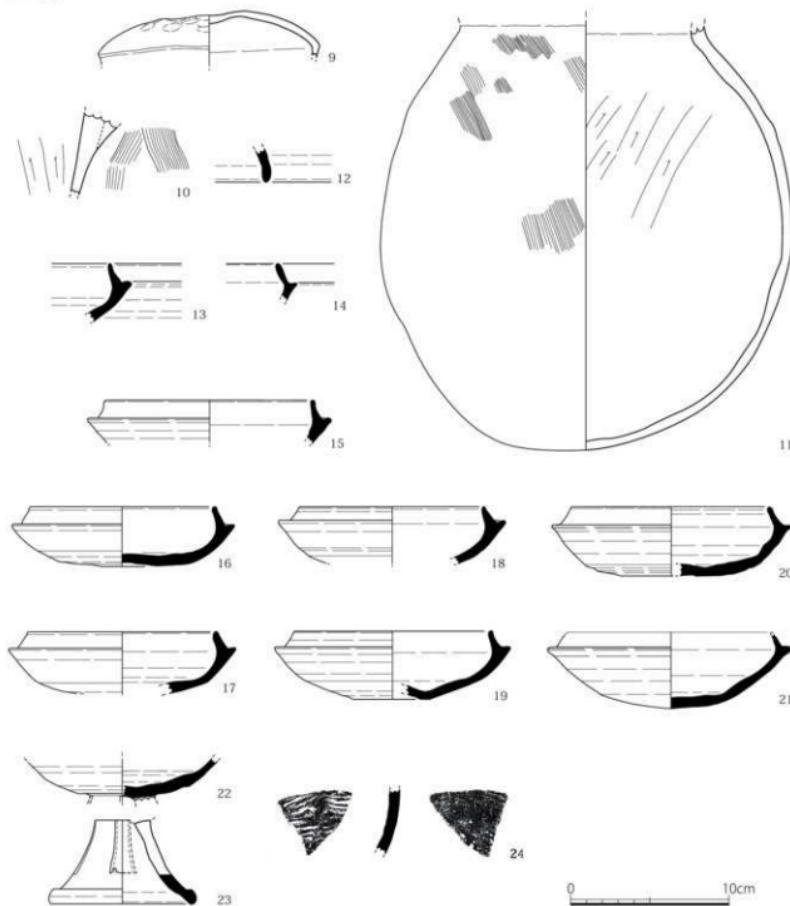
なお、調査区南側で東西方向に連続する溝状遺構があるが、遺物は皆無であった。このほか、調査区内には多くの複雑坑があり、コンクリートブロックに混ざって土器、陶磁器片が出土している。また表面採集品として以下に報告する旧石器が 1 点ある。

台形様石器 35 は台形様石器。先端部に刃部を設定し、撥状の形態をとる。幅広の不定形剥片を素材とし、両側縁部を加工している。右側縁部は腹面から、左側縁部は背面からそれぞれ調整している。ただし、左側縁部の調整は、素材面や他の剥離面とは異なり、風化が新しく二重バティナとなっている。また微細剝離を有する。そのため、当初の器種からスクリエイバー等に転用された可能性が高い。風化の進んだ面をみると、当初の形態も多少幅広となるが、やはり撥状を呈する台形様石器と理解される。特に先端部の摩滅が著しく使用による可能性が高い。長さ 3.2cm、幅 2.4cm、厚さ 0.75cm、重さ 4.7g、珪質岩製。

SI1 上層



SI1 下層



第8図 福原原開遺跡竪穴建物1出土土器実測図(1/3)

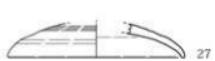
SD1



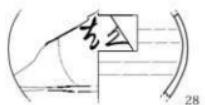
25



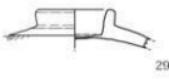
26



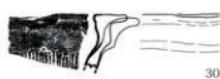
27



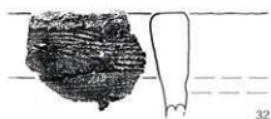
28



29



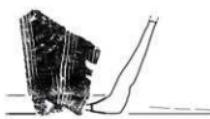
30



32



33



31



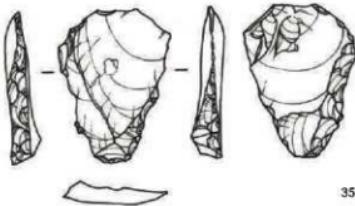
1



34



表採



35



第9図 福原原開遺跡溝1ほか出土遺物実測図(1/1・1/3)

第4節 竹並下ノ原遺跡（第10・11図、図版11・12、表4）

竹並下ノ原遺跡は、東九州自動車道建設に伴い新規に確認された遺跡で、平成22年度に行橋市教育委員会が調査を行っている。本調査は第2次調査となり、行橋市南泉4丁目667-2番地の約30m²の調査を行った。遺構検出面の標高は18.0～18.2mである。

遺構は溝（SD）、土坑（SK）、土器埋設遺構（SX）を検出した。以下に報告する。

SD001 調査区の北側を東西に横断する。最大幅1m、長さ約1.6m分を検出した。現存部の上端で標高18.1m、底面は17.84m。出土遺物は未図化だが、型紙摺の染付、色絵などがある。近世後半に位置づけられる。

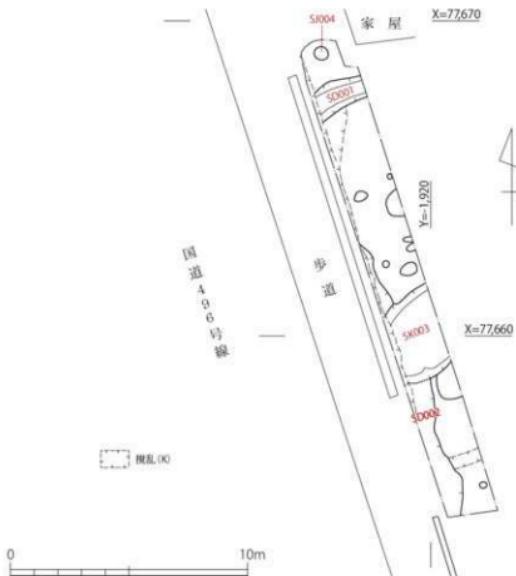
SD002 調査区の南側を南北に流れる。SK003に切られる。検出した長さは約9m。出土遺物は土師器、須恵器があるが、細片のため図示にたえない。

SK003 調査区のほぼ中央にあり、調査区外に広がる。南北は3.5m、東西は不明だが、大型の楕円形を呈するものと考えられる。上端は標高18.1m、底面は17.79m。弥生土器、須恵器、染付が出土した。染付は後世の流れ込みで、遺構の下限は古墳時代である。

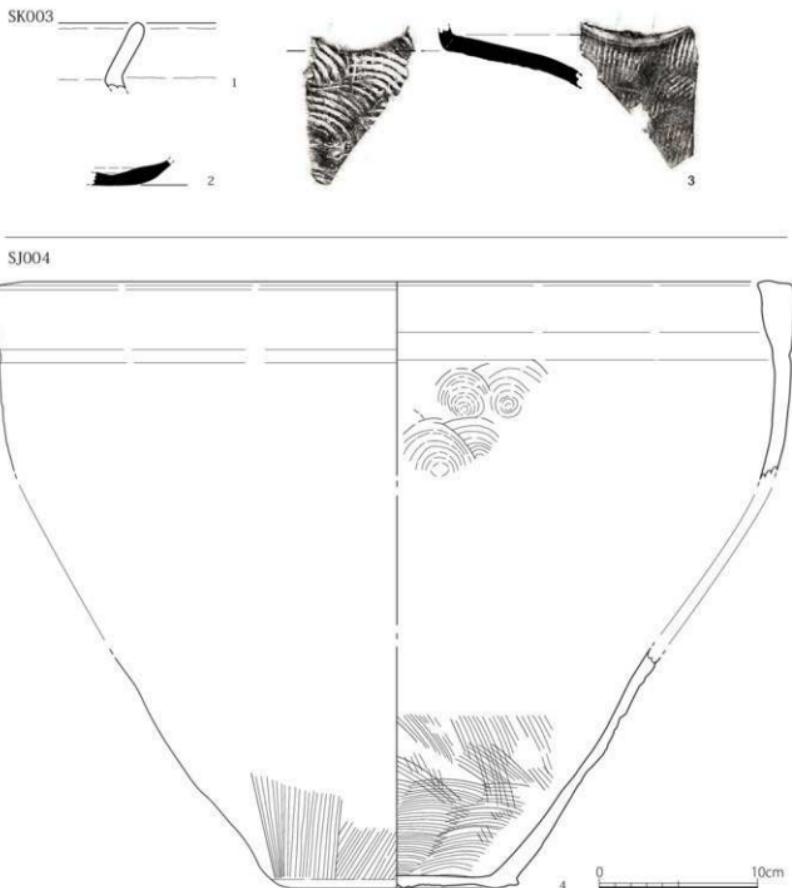
弥生土器 1は甌の口縁部。図化できないが同一個体と思われる胴部の細片が複数ある。

須恵器 2は环の底部片。3は甌の口縁部片。いずれも小片である。

SJ004 調査区の北側で検出した。近世以降の所産と考えられる瓦質土器の甌を埋設する。胴部の下位より上方は削られ、底部が残っていた。内側は褐色土で埋まっており、一部口縁部片が落ち込んでいた。残存部位で直径0.35m、深さ0.15m、底面は標高17.94mを測る。



第10図 竹並下ノ原遺跡遺構配置図(1/200)



第11図 竹並下ノ原遺跡出土土器実測図(1/3)

瓦質土器 4は甌。復元口径 46.95cm、底部は完形で、底径 15.9cm を測る。胴部を欠くが、器高 38.4cm に復元、図示した。底部は平底で薄く 0.5 ~ 0.8cm 程しかない。内面上位は同心円文の当具痕跡を残すが、下位は粗いハケ調整で仕上げる。外面はタタキ後、下位は一部タテ方向のハケ調整で仕上げる。

番号	出土遺物	種別	器種	遺量(cm)	調査	地成	色調	残存	備考
1	SK1	土師器	壺	深×口径13.7 底径4.6	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部へ凹み未調査	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡赤V95/8 外: 黄褐色V95/6	3-4程度 赤泥斑は完形	
2	SK1	土師器	壺	高さ1.65	内: 陶輪ナメ 底部斜面剥離不規	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V97/3 外: 淡黄V97/4	遺留片	
3	SK1	土師器	壺	高さ2.80	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V97/4 外: 黄褐色V95/6	遺留片	
4	SK1	土師器	壺	高さ1.15 底径2.1	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～口部ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/6	4-5程度	
5	SK1	土師器	壺	残高2.35	内: 陶輪ナメ～口部ナメ 外: 陶輪ナメ～口部ナメ	良好	陶輪～1.5mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/7	1-4程度	
6	SK1	土師器	壺	残高1.11	内: 陶輪ナメ	不良	陶輪～6mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V97/2	断面片	摩滅著L:
7	SK1	陶器器	壺	高さ13.13 底径2.85	内: 陶輪ナメ 不定方向ナメ 外: 陶輪ナメ 上半周斜面剥離～7cm	やや不良	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V97/3 外: 黄褐色V97/3	1-3程度	
8	SK2	陶器器	壺	高さ13.8 底径2.85	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/9	1-4程度 外端灰被り	
9	SK3	陶器器	壺	高さ13.6 底径2.9	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V96/2	口縁断面	
10	SK3	陶器器	壺	高さ13.6 底径2.9	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	1-5程度	
11	SK3	陶器器	壺	残高2.3	内: 陶輪ナメ(開口円弧直角)～口部ナメ 外: 陶輪ナメ～口部ナメ	良好	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1 外: 淡黄V96/4	断面片 天地、細身不規則 外端灰被り	
12	P4	土師器	壺	残高2.2	内: 陶輪ナメ～口部ナメ 外: 陶輪ナメ～口部ナメ	良好	陶輪～薄黄を含む 内: 淡黄V96/8	口縫断面	
13	P4	陶器器	壺	高さ15.6 底径2.8	内: 陶輪ナメ 不定方向ナメ 外: 陶輪ナメ 上半周斜面～7cm	やや不良	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/7	1-3程度	
14	P4	陶器器	壺	高さ15.6 底径2.9	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部斜面～7cm未調査 ～口部ナメ	良好	陶輪～白色繊維、雲母を含む 内: 淡黄V96/2 外: 淡黄V96/2	断面片 十字のマニ記号	

表1 柳井田下ノ原遺跡出土遺物観察表

番号	出土遺物	種別	器種	遺量(cm)	調査	地成	色調	残存	備考
1	SI1上層	陶器器	杯差	深×口径12.8 底径5.0	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1 外: 淡黄V96/1	口縫断面	
2	SI1上層	陶器器	杯差	高さ13.0	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～1.5mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1 外: 黄褐色V95/1	口縫断面	
3	SI1上層	陶器器	杯差	高さ2.65	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口縫断面	
4	SI1上層	陶器器	杯差	高さ1.9	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部斜面剥離～7cm	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	口縫断面	
5	SI1上層	陶器器	杯差	残高3.25	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口縫断面	
6	SI1上層	陶器器	杯差	残高2.65	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ	良好	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/2 外: 黄褐色V95/2	口縫断面	
7	SI1上層	陶器器	杯差	残高2.7	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～1.5mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/3 外: 黄褐色V95/3	口縫断面	
8	SI1上層	陶器器	杯差	高さ12.8 底径4.0	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査	良好	陶輪～6mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/2 外: 黄褐色V96/1	1-4程度	
9	SI1下層	土師器	杯差	高さ3.0	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ～口部ナメ	やや不良	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V95/6	口縫	
10	SI1下層	土師器	瓶?	残高5.2	内: 陶輪ナメ～7cm 外: 陶輪ナメ～7cm	良好	陶輪～2mmの白色繊維、雲母を含む 内: 淡黄V96/7 外: 黄褐色V97/1	断面片	
11	SI1下層	土師器	瓶	最大径26.2 底径7.2	内: 陶輪ナメ～7cm 外: 陶輪ナメ	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/4 外: 淡黄V95/4	断面3/4程度	
12	SI1下層	陶器器	杯差	残高2.15	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口縫断面	
13	SI1下層	陶器器	杯差	残高3.2	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口縫断面	
14	SI1下層	陶器器	杯差	残高3.4	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～3mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口縫断面 外端灰被り	
15	SI1下層	陶器器	杯差	高さ13.1 底径2.7	内: 陶輪ナメ	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	口縫断面	
16	SI1下層	陶器器	杯差	高さ11.8 底径3.6	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～3mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	1-2程度	
17	SI1下層	陶器器	杯差	高さ12.3 底径4.0	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	1-3程度	
18	SI1下層	陶器器	杯差	高さ11.6 底径3.5	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～2mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	口縫断面	
19	SI1下層	陶器器	杯差	高さ10.2 底径3.5	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～3mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	1-4程度	
20	SI1下層	陶器器	杯差	高さ10.7 底径4.3	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V95/1	1-3程度	
21	SI1下層	陶器器	杯差	高さ4.7	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	不良	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	2-3程度	摩滅著L:
22	SI1下層	陶器器	杯差	高さ2.2	内: 陶輪ナメ 外: 陶輪ナメ 底部～7cm未調査～7cm	良好	陶輪～1mmの白色繊維を含む 内: 淡黄V96/1	口向透S:	

表2 福原原開原遺跡出土遺物観察表1

番号	出土遺物	種別	器種	法長(cm)	調査	度成	土色	残存	備考
23	SH 下層	須恵器	高井	高さ8.2 径高5.4	内:凹輪ナナ 外:凹輪ナナ→透孔・穿孔	良好	黒釉±白色細緻土を含む	内:灰3V6/1 外:灰2.5V6/2	縦断片 4万円附近
24	SH 下層	須恵器	甕	高さ4.05	内:コロナナ→(青海波文当具柄) 外:コロナナ→格子丁文や8字?	不良	黒釉±1mmの白色細緻土を多く含む	内:灰黄褐10V3B/2 外:灰2.5V7/2	縦断片 天地、縫合不規則
25	SD1	鏡	圓	直径6.6 径厚2.25	内:コロナナ→格子丁文→板鏡 外:コロナナ→透孔→板鏡	良好	黒質	素地:灰 黑釉10V3B/2 縫合:灰2.5V7/0	見込みに「透」?
26	SD1	須恵陶器	碗	高さ4.6 径高2.9	内:コロナナ→板鏡 外:コロナナ→板鏡	良好	黒質	素地:灰 黑釉2.5V8/3 縫合:灰2.5V8/3	縦断片
27	SD1	須恵陶器	壺?	高さ12.8 径高5.15	内:コロナナ→板鏡→上部縁き取り 外:コロナナ→板鏡	良好	黒質	素地:灰 黑釉10V3B/2 縫合:灰2.5V8/3	1.0程度 蓋の可能性あり
28	SD1	須恵陶器	瓶	高さ5.4	内:コロナナ→板鏡	良好	黒質	素地:灰2.5V7.5V7/2 縫合:灰2.5V7/1	縦断片
29	SD1	須恵陶器	瓶	径高2.45	内:コロナナ→板鏡(鉢形) 外:コロナナ→攢み削り切っ→一部崩離	良好	黒釉±白色細緻土を含む	素地:灰 黑釉10V3B/4 縫合:灰2.5V8/4	手平継
30	SD1	陶器	壺	径高3.4	内:コロナナ→標目施文 外:コロナナ	良好	黒釉±2mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉10V3/2 外:灰2.5V6/6	白縦断片 有白になら
31	SD1	陶器	壺	径高5.9	内:コロナナ→標目施文 外:コロナナ	良好	黒釉±2mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉10V3/3 外:灰2.5V4/2	縦断片
32	SD1	瓦質土器	大甕	径高6.6	内:コロナナ→コハラ	良好	黒釉±2mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉2.5V7/2	白縦断片 花野焼
33	SD1	瓦質土器	瓶?	径高3.05	内:コロナナ 外:コロナナ	良好	黒釉±1mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉10V3S/2 外:灰 黑釉10V3S/4	縦断片
34	SD1	土製品	人形	径高4.55 高さ2.65	内:コロナナ 外:透かし透	良好	黒釉±2mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉10V3Z/2 下:手平片	他形
35	直接	石器	石研磨器	高さ6.2 径高5.75 重さ347kg	—	—	黒褐色3V6S/2	—	石材は珪質岩

表3 福原原開原遺跡出土遺物観察表2

番号	出土地點	種別	器種	法長(cm)	調査	度成	土色	残存	備考
1	SK1	衛生土器	甕	高さ4.2	内:コロナナ 外:コロナナ	良好	黒釉±3mmの白色細緻土を含む	内:健5V8B/6 外:灰2.5V6/6	白縦断片 縦断片あり
2	SK1	須恵器	瓶	高さ1.6	内:凹輪ナナ→透孔→穿孔	やや不良	黒釉±2.5mmの白色細緻土を含む	内:灰2.5V8/2	縦断片
3	SK1	須恵器	甕	径高3.7	内:コロナナ→(青海波文当具柄) 外:コロナナ→平行8字→透孔	良好	黒釉±1.5mmの白色細緻土を含む	内:灰2.5V6/2 外:灰2.5V7/2	縦断片
4	SJ1	瓦質土器	甕	径高4.35 高さ3.4	内:コロナナ→(周孔)瓦当具柄 外:コロナナ→タキヨ→透孔	良好	黒釉±6mmの白色細緻土を含む	内:灰 黑釉10V3B/2 外:12.5S/1 黑褐10V3Z/4	白縦断片 底形

表4 竹並下ノ原遺跡出土遺物観察表

第4章 結語

本報告では、平成23年度に県道長尾稗田平島線歩道整備等に伴って発掘調査を行った柳井田下ノ原遺跡、福原原開遺跡、竹並下ノ原遺跡について述べてきた。それぞれ調査地点の大字小字を組み合わせて便宜的に報告を行ったが、3遺跡は近接し、同じ低位段丘に立地することから、本来的には1つの遺跡（以下「福原遺跡群」と仮称）を形成していたものと考えられる。ここでは結語として、すでに調査された周辺遺跡の状況を加味しつつ、福原遺跡群の意義について述べたい。

この段丘に人が住み始めたのは後期旧石器時代のことである。表面採集品ではあるが、約2万5千年前のA T降灰後の台形様石器があり、周辺の鬼熊遺跡や柳井田早崎遺跡でも同時期の旧石器が出土している。続く縄文時代の活動は福原遺跡群では捉えられていないが、北東方向に程近い柳井田早崎遺跡では、上述のA Tに加えアカホヤの広域テフラを確認しており、縄文時代後晩期の土器などが出土する。また長者原遺跡では市内でもまだ2例しか調査例がない縄文時代の竪穴建物の1つが見つかっている。

続く弥生時代では本調査の一年前、東九州自動車道建設に伴って調査した竹並下ノ原遺跡の第1次調査で、弥生時代前期後半の大型の竪穴建物が見つかっている。この段丘では、この頃から後期前半まで継続して人々の営みを追うことができる。本調査でも遺構は見つかっていないが、後期前半の土器がある。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての活動は不明確だが、古墳時代前期頃より南の竹並の丘陵上には墓地形成が始まり、古墳時代中期から終末期にかけてはわが国でも最大規模の横穴墓群が営まれることとなる。その經營母体となる集落遺跡はいまだ明確ではないが、福富小畠遺跡や鬼熊遺跡、柳井田早崎遺跡、赤ハゲ遺跡などが候補となるようか。本調査でも後期の竪穴建物を1軒確認している。

律令制がしかれ、国家としても成熟していく奈良時代には、西に500m程の地点で調査された福原長者原遺跡がある。平成24年度の調査で、約150m四方の九州最大規模の官衙遺跡であることが分かった。本調査でも同時代の土坑や柱穴を確認しているが、遺構の性格は明確でなく今後の調査に期したい。

その後、この段丘における人々の営みは、考古資料を見る限りにおいて中世後半までほとんど明らかではない。わずかに鬼熊遺跡の白磁を副葬した土壙墓が知られる程度である。中世末期の様相は北の福富小畠遺跡や西の矢留堂ノ前遺跡で、戦国期に特有の方形に溝をめぐらせ区画をもつ集落が調査されており、徐々に明らかになりつつある。

近世期、すなわち江戸時代には、国道496号線は在郷町・大橋から福富を経由し国分方面に至る脇道として成立していたことが、正保の豊前国絵図（1644年作成）から判断される。併せて国絵図には諸村の石高、その間の距離などの書付があり、今川、祓川間の段丘沿いには北から崎野、長江、福富、柳井田、竹並（武波）などの村が形成されていたことが分かる。福原遺跡群のある福原村は正保の豊前国絵図には記載がないが、行橋市の指定文化財である『国作手永大庄屋御用日記』にはその存在が確認でき、福富村の南、柳井田村の西、竹並村の北に位置したと考えられる。本調査では、ほんのわずかではあるが、上限が当該期にさかのぼるであろう溝を確認した。限られた文献史料を補完する意味で考古学的調査が果たす役割は大きく、今後の地域史解明のためにも周辺の調査事例の蓄積を待ちたい。

図 版



(行橋市 都市計画基本図修正 平成13年撮影)

柳井田下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡の位置

図版2



1. 柳井田下ノ原遺跡
〔調査前〕（西から）



2. 柳井田下ノ原遺跡
1区全景（東から）



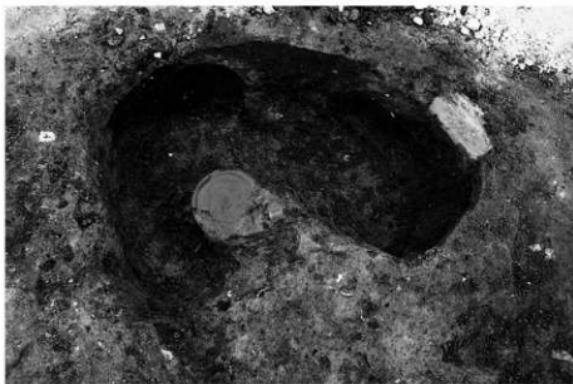
3. 柳井田下ノ原遺跡
3区全景（東から）



1. 柳井田下ノ原遺跡 3区
土坑1（南西から）

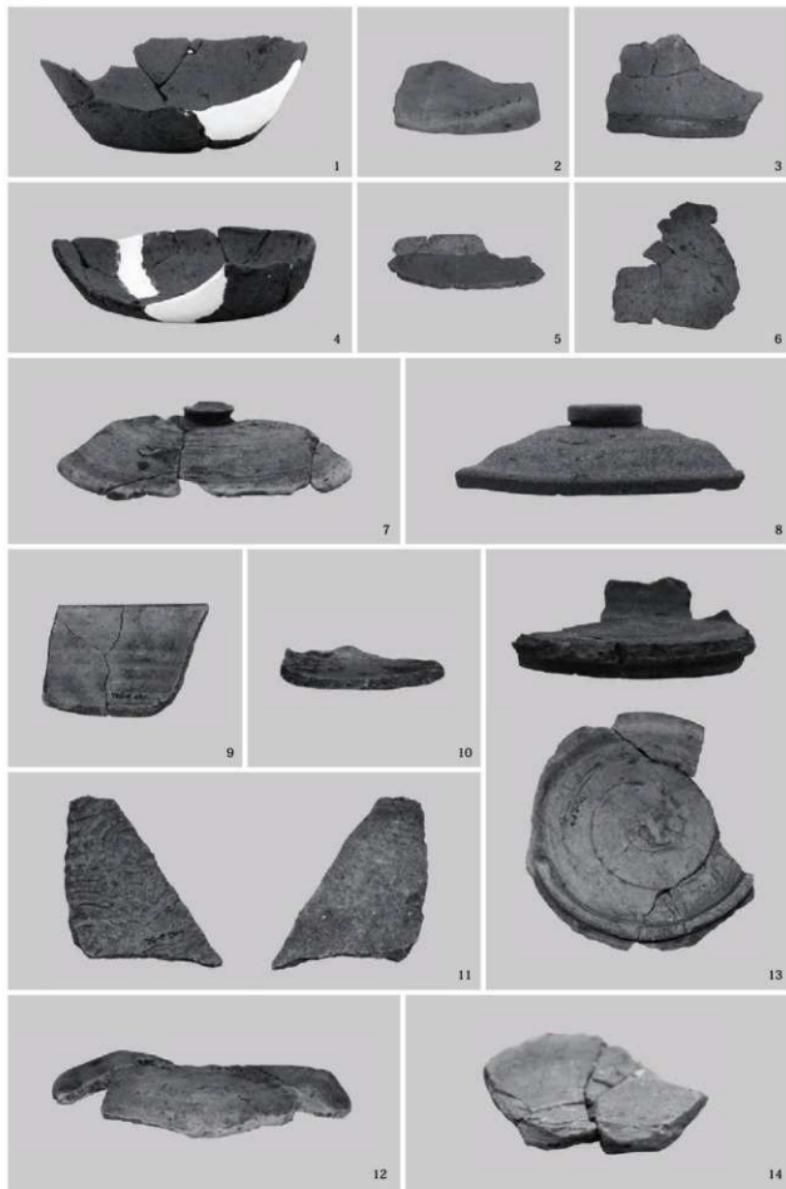


2. 柳井田下ノ原遺跡 3区
土坑1 遺物出土状況



3. 柳井田下ノ原遺跡 3区
柱穴4 遺物出土状況

図版 4



柳井田下ノ原遺跡出土遺物



1. 福原原開遺跡 1 区
〔調査前〕（南から）



2. 福原原開遺跡 1 区全景（南から）



3. 福原原開遺跡 1 区全景（北から）

図版 6



1. 福原原開遺跡 1 区
竪穴建物 1
遺物出土状況（西から）



2. 福原原開遺跡 1 区
竪穴建物 1（西から）



1. 福原原開遺跡 1 区
竪穴建物 1
土師器出土状況（西から）



1. 福原原開遺跡 1 区
溝 1 (南西から)



2. 福原原開遺跡 1 区
溝 1 東側土層 (西から)



3. 福原原開遺跡 1 区
溝 1 西側土層 (東から)

図版 8



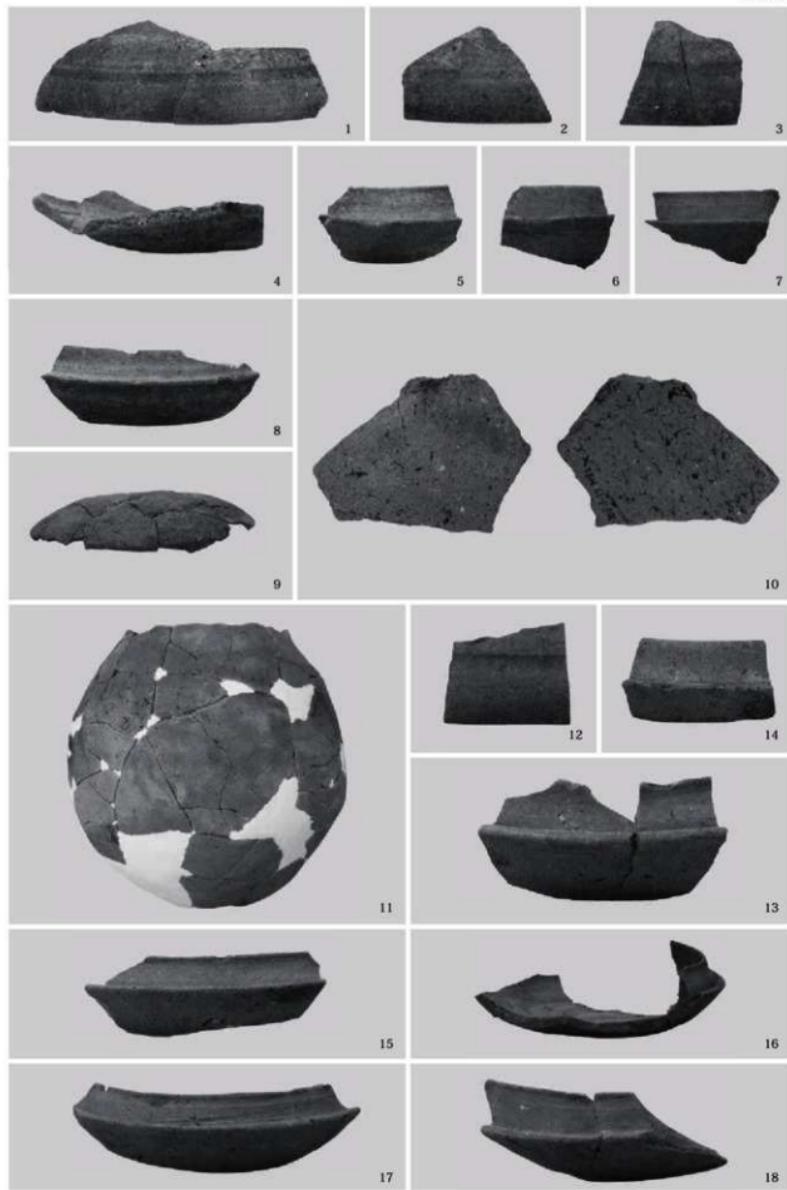
1. 福原原開遺跡 2 区
〔調査前〕(北から)



2. 福原原開遺跡 2 区
全景 (北から)

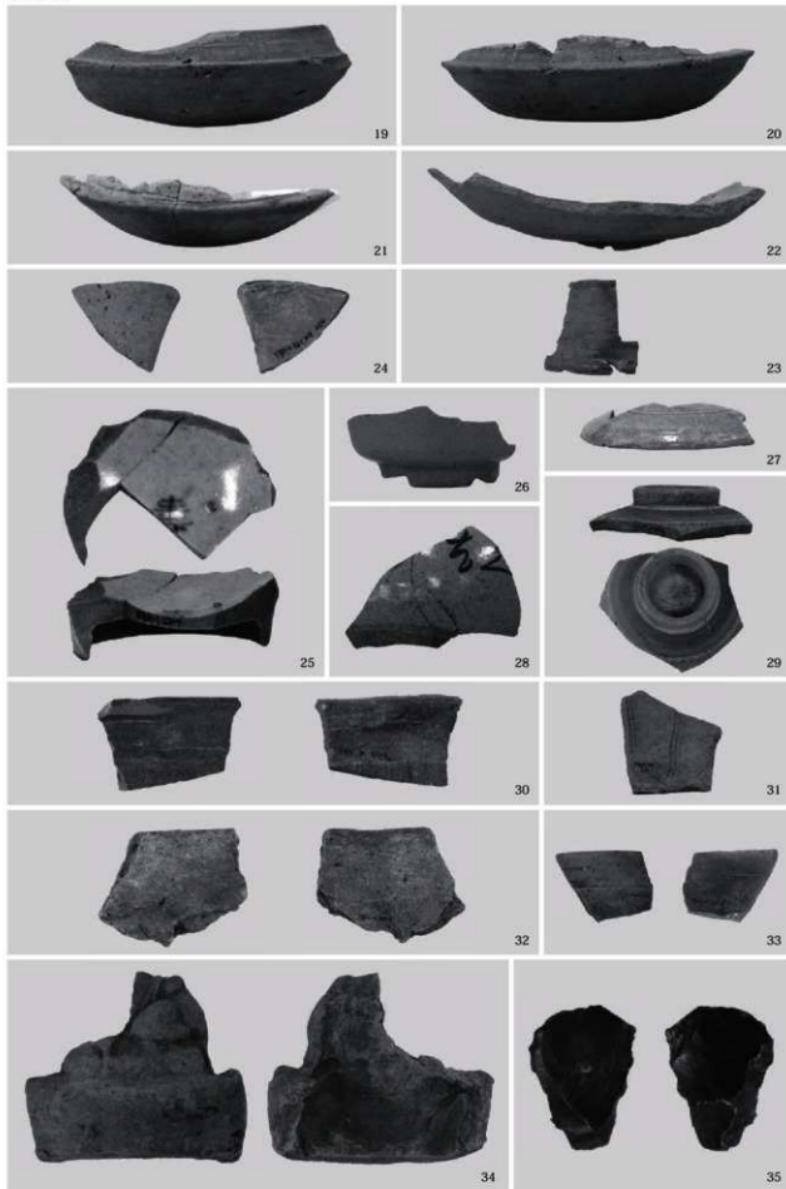


3. 福原原開遺跡 2 区
溝状遺構 (東から)



福原原開遺跡出土遺物 1

図版 10



福原原開遺跡出土遺物 2



1. 竹並下ノ原遺跡全景（北から）



2. 竹並下ノ原遺跡全景（南から）

図版 12



1. 竹並下ノ原遺跡土器埋設遺構



2. 竹並下ノ原遺跡土器埋設遺構土器取り上げ後



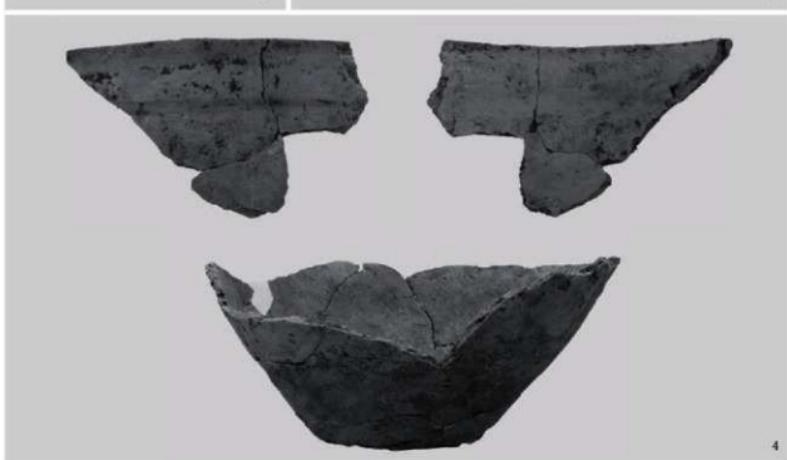
1



2



3



4

3. 竹並下ノ原遺跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

2013年3月22日 発行

柳井田下ノ原遺跡
福原原開遺跡
竹並下ノ原遺跡 2

行橋市文化財調査報告書第48集

著作権所有 福岡県行橋市中央1丁目1番1号
発行者 行橋市教育委員会

印刷者 福岡県行橋市大橋三丁目1番18号
はら印刷